

縄文文化に深くかかわっていた環境変動とは

NPO法人つがる縄文の会（川嶋大史理事長）が「JOMON亀ヶ岡文化フォーラム2023」を開催。北東北各地で遺跡発掘調査の指導などにかかわり、世界最大規模といわれる「出来島最終氷期埋没林」を発見した東京大学名誉教授の辻誠一郎氏が講演しました。

辻氏は、約5,900年前の十和田火山の巨大噴火で針葉樹林から広葉樹林に生態系が激変し、円筒土器文化が広まり、大きな集落がたくさんできたなどと解説。また、「つがるには、亀ヶ岡遺跡と田小屋野貝塚だけでなく、見るべきものがたくさんある。機会をつくって、皆さんを案内したいと思っている」と話しました。

フォーラムでは、このほか、市教育委員会学芸員が令和4年度に行った田小屋野貝塚の発掘調査の結果を報告。木造高校情報システム系列の生徒は、VR（仮想現実）を活用して縄文遺跡の魅力を情報発信する取り組みを紹介しました。



2/18
松の館

講演する辻氏

ボランティアに汗を流す木造高生



2/23
柏地区

生活路を確保するためスコップで雪を片付ける木造高生

木造高校の生徒10人が、市社会福祉協議会の職員と一緒に柏地区で雪かきボランティアを行いました。

この日、成田孝夫さんの自宅に向かうと、敷地には1.5畝ほど雪が積もり、生活路をふさいでいました。生徒たちはスコップを手に、道路から自宅玄関前まで約15畝の距離の雪を片付け、歩いて通れるようにしました。

雪かきが終わると、成田さんは生徒や職員たちに「助かります。本当にありがとうございます」と感謝しました。サッカー部キャプテンの羽場怜翔君は「疲れたけど、人の役に立てて気持ちがいい。これからも機会があれば参加したい」と話しました。

同高では、2月25日にも、市内で雪かきボランティアを行いました。

市民と関係人口が一緒になって縄文のPR方法を考える

市では、地域の活力向上のため、市民と関係人口が継続的に協働し、課題解決の提案や事業の創出に取り組んでいます。

2月22日から25日まで、首都圏や北海道、県内などから6人が現地ツアーで市を訪れ、「観光」と「農業」の2班に分かれて、土器づくり体験やメロンの種植え作業などを通じて理解を深めました。

ツアー最終日には、NPO法人つがる縄文の会のメンバーも加わって一緒にツアーを振り返り、世界遺産に登録された縄文遺跡をPRするため、どんなことができるか意見を交わしました。ツアー参加者は「消火栓や商店のディスプレイなど、市内の至る所にしゃちゃんがあととおもしろい」「公共交通の情報がなさすぎる」といった意見が出されました。

今後は、縄文好きの観光客がスムーズに市内を見て回れるマップや周遊コースを検討していく予定です。



2/25
木造千代町

意見を出し合うツアー参加者と縄文の会メンバー

児童の安全を守るため 伊藤鉱業が防犯ブザー寄贈

3/1
市役所



倉光市長に目録を手渡す神専務(中)と神営業部長(右)

株式会社伊藤鉱業(増田教正代表取締役社長)が新入学児童の登下校時の安全に役立ててほしいと、市に防犯ブザー220個を寄贈しました。同社は、地域貢献活動の一環として平成28年から市に防犯ブザーを寄贈しており、今年で8回目。防犯ブザーは市内全小学校の新1年生全員に贈られます。

この日、同社の神義三専務取締役と神栄取締役営業部長が市役所を訪れ、倉光市長に目録を手渡しました。

倉光市長は「この世の中、何があるか分からない。子どもが自分で意思表示できる非常によいブザーで防犯に役立つ」と感謝しました。神専務取締役は「地域貢献のため、これからも継続していきたい」と話しました。

ミスキャンパスと木造高生が市の魅力を掘り起こす

市では、「キャンパスラボ」のメンバーと木造高校の生徒と一緒に、「つがる」という新しい動詞の活用を考案し、「新解釈つがる辞典」にまとめ、広告ポスターや冊子を制作して、つがるの魅力を若者の目線で広く情報発信する取り組みを進めています。

キャンパスラボは、首都圏の各大学のミスキャンパスからなる地域課題解決に取り組むチームで、3人のメンバーが市を訪れ、木造高校の生徒15人と一緒に市内を巡りながら、3月3日から3日間かけて新たな魅力を掘り起こしました。

初日の振り返りを終えた木造高校の對馬優斗君は「メロンの水耕栽培を見学して、1年中出荷できるので、市を全国にPRできる良いチャンスだと思った」と話し、東京女子大の野辺有桜さんは「つがる市にはおおらかな人柄の方が多く、心にゆとりがあると感じた。面白い広告ポスターを完成させたい」と話しました。



3/3
市役所

グループに分かれてアイデアを出し合う木造高生とキャンパスラボの野辺さん(右)

ふるさとへの思い版画へ 故藤田明夫さん作品展を開催



3/3
市立図書館

作品を鑑賞する葛西教育長と藤田敏幸さん

2月28日から3月26日まで、市立図書館で「藤田明夫版画展」が開かれました。故藤田明夫さん(1934年～2016年)は、旧稲垣村に生まれ、小学校教員として、特に美術教育に力を注ぎ、向陽小学校長で定年退職。その後は、自身の版画制作を精力的に行いました。

展示された版画は、かやぶき屋根の生家「齊藤家」やカラーで春夏秋冬それぞれの季節の「ポプラ」を表現したシリーズ、チェスボロー号遭難事故の様子を表現したカレンダー、馬市まつりの様子など、どれも見ごたえのある作品ばかり。

藤田さんの長男の敏幸さんは「津軽の魂を感じる作品を今回は選んだ。子どもたちに見てもらい、少しでも関心をもってもらえれば」と話しました。葛西教育長は「棟方志功がでた本県の中でも、西北地域は版画のレベルがすごく高い。そこまでレベルを高めた一人が藤田明夫さん。今後も藤田さんの版画展を開催していきたい」と話しました。